

## シエナ大聖堂内ニコラ・ピサーノ作説教壇の同教会彫刻への影響(ジョヴァンニ・ピサーノ、カマイーノ・ディ・クレッシェンティーノ、ティーノ・ディ・カマイーノ、マルコ・ロマーノ)

### ■ 名保紀

神聖ローマ皇帝フリードリッヒ二世支配下の南伊アブリア地方で1210年ごろ生まれたイタリア・ゴシック彫刻の開祖ニコラ・ピサーノは、トスカーナの皇帝派を代表する都市ピサの洗礼堂内に、預言者フィオーレのヨアキム（1202年没）が「父と子に続く聖霊、第三の段階」、即ち愛、自由、友情による千年王国の始まる時と予言した1260年に、三という数を随所に強調し、三層構造、正六角形プランによる説教壇を完成した。そして1250年代から造営に携わっていたシエナ大聖堂の大円蓋の下に、正八角形プランの説教壇を1265年着工し1268年に完成した。

シエナは1260年9月4日のモンタペルティの戦いの前日、聖母マリアに全市民的祈りをささげた結果、法王派のフィレンツェ軍を奇跡的に破るが、それにはフリードリッヒ二世の息子マンフレディの援軍も貢献していた。いずれにせよ説教壇の建設にはモンタペルティの戦勝をもたらした聖母マリアへの感謝の意もあった筈で、事実第三層に優美な聖母子像が設置された。また1260年はフィオーレのヨアキムの第三、聖霊の段階開始の年であったから、モンタペルティの勝利はまさに聖霊の加護による「第三の段階」到来の証として捉えられ、同説教壇ではピサ説教壇同様フィオーレのヨアキムの要素が強調された筈である。例えば中心柱の基壇部に七大自由学芸及び哲学を象徴する女性像が表されたが、ヨアキム思想の基本理念、「自由」が象徴されたと思う。また第三層では説教壇本体と梯子とをつなぐ廊下の起点に現ベルリン美術館蔵の大天使ガブリエル像が立ち、一連の説話的浮彫に先行する処女マリア像とともに「受胎告知」が表された。聖霊が支配する説教壇、聖霊による「第三の段階」の結実たる聖母マリアの加護を称えたモニュメントという意味をそこで強調したのだと思われる。

フィオーレのヨアキムのユートピア思想、「第三、聖霊の段階」の根本理念はヨハネ黙示録に記述された再臨のキリストによる千年王国が地上に現実に樹立されるということであった。そしてヨアキム主義者フリードリッヒ二世は自らを再臨のキリストと公言したが、シエナ説教壇第三層では再臨のキリスト、その頭上に聖霊の鳩が止まる玉座が表され、まさしくフィオーレのヨアキムの思想を反映した。またピサの説教壇同様第三層の浮彫をドラマティックな黙示録の「最後の審判」場面が締めくくったが、それを二パネルによるものに増強した際、復活して天国行きを保証される人物中、フリードリッヒ二世が発行したアウグスターリ金貨に表された若き帝の横顔を反映するかの肖像が登場している。モンテカティーニの勝利に貢献したマンフレディ王は1266年アンジュー家のカルロー一世に敗れて死去、また1268年10月に説教壇が完成した時、フリードリッヒ二世の孫コッラディーノはナポリで処刑されシュタウヘン朝は事実上崩壊した。しかしシエナは1270年まで皇帝

派政権を維持し続けた。それ故シエナ説教壇にはシュタウフェン朝への謝意並びに鎮魂の意も息づいていた筈である。さらにこの説教壇のシュタウフェン朝へのオマージュの実態は、第一層に九つの柱と四ライオン像を配置して出来る平面図がエルサレム王国の紋章「エルサレム十字」を意識したものであるのを見ても明らかである。同紋章は大きな正方形がギリシャ十字により四分割される上に成立していた。その際四つに分割された正方形の内部に小さなギリシャ十字が表わされ、また大きな正方形の四つの角を取り去ってできる全体で「エルサレム十字」は成立していた。フリードリッヒ二世、コッラード二世、コッラディーノという三代はいずれもエルサレム王であったから、エルサレム王国の紋章を反映したシエナ説教壇には彼ら三王の墓の意味合いも隠されていたと思われる。また二重基壇上にエルサレム十字をイメージし、十字の中心に正方形を加え、そこに聖霊の鳩を表してヨアキム思想を象徴した13世紀の優れた細密画がレッジョ・エミリアの修道院に存在するが、同構図はシエナ説教壇第一層の平面図に、形状のみならず思想的にも影響していた筈である。

さてシエナ大聖堂にはティーノ・ディ・カマイーノが1316-7年に制作した枢機卿リッカルド・ペトロニの墓が存在している。四つの持ち送りが支える壁面墓の下には1590年代までアレキサンドリアの聖カテリーナの祭壇が設置されていた。本来墓は左翼廊の、今日「洗礼者ヨハネの礼拝堂」の入り口に当たる場所に設置され、そこから大聖堂の円蓋の下に存在したニコラ作説教壇を見極めることが出来た。従ってシエナ大聖堂内にニコラの大説教壇が築かれ丁度半世紀の後に落慶したティーノ作の壮大な墓には説教壇の芸術的影響が必ずやあった筈である。例えば今ここではその一例のみを挙げてみよう。壁面墓の、四つの持ち送りが支えた基台部を下から見上げると、持ち送りを挟んで計三つ浮き彫りによる大きな正方形がなされているのが確認できる。大きな正方形はこれまた大きなギリシャ十字により四つの小正方形に分割され、各小正方形内には小ギリシャ十字を彷彿させる植物装飾が確認できる。これら三つの大正方形はいずれもニコラのシエナ説教壇第一層で九つの柱及び四ライオン像が形成した平面図の特色、「エルサレム十字」を反映したものであろう。シエナ生まれの教会法の権威、博識であった枢機卿ペトロニはニコラの説教壇第一層の形状がエルサレム王国の紋章を反映したこと、またそれはヨハネの黙示録が立方体としてとらえていた「天上のエルサレム」の平面図から発していたことも承知していた筈である。それ故ティーノはペトロニの墓下方の祭壇がカテリーナ、マグダラの MARIA、アンニエーゼの三聖女像を伴うことに呼応し、それらの上方の墓の基台部装飾として、ニコラのシエナ説教壇第一層の平面図に読み取った「エルサレム十字」、即ち『天上のエルサレム』を反映した構図を三つ一挙に施したと思われる。ちなみにティーノによる三という数への格別のこだわりは、フィオーレのヨアキムの「第三の段階」の優れた芸術表現をニコラの説教壇が同大聖堂内で標榜していたことに回帰するが、ティーノが既にピサ大聖堂内1315年作の皇帝の墓付属の聖バルトロメオの祭壇上に、フィオーレのヨアキムの「第三の段階」を強調する父、子、聖霊の象徴たる三立像を設置したこと

で既に顕著に表れていた。なお本論考では、ティーノ以前にシエナ大聖堂に於けるジョヴァンニ・ピサーノ、ティーノの父・カマイーノ、そしてマルコ・ロマーノの彫刻で、ニコラ・ピサーノ作シエナ説教壇が意図したヨアキムの思想の芸術表現からの重要な影響を把握出来るという点も明確化しようとした。